精神保健福祉家族会
シュロの会たより
発行：令和5年11月12日
発行責任者：シュロの会
No. 159

東京都議会本会議で **滝山病院事件**の **陳情**が**趣旨採決**されました！

都立病院でも慢性期の身体合併の患者さんを受け入れ欲しい

シュロの会会長　植松 和光

１０月５日の東京都議会本会議において東京つくし会が都議会議長に提出した「医療機関における精神障害者に対する虐待の防止と適正な医療へのアクセスに関する陳情」が全一致で趣旨採択されました。

都議会で陳情が採択されるのはなかなか大変なことで、令和５年は初めてのようです。都議会各会派の議員も滝山病院事件についてはとても深刻に受け止めているようで、すべての会派から一般質問等を行っています。

今、みんなの願いは、虐待や暴行また、死亡退院率の一番高い滝山病院から、退院、転院を希望している入院患者さんを一日も早く出してあげることだと思います。そのためには、まずは都立病院が率先して、慢性期の身体合併のある患者さんの受け入れを行うべきだと思いますが、そうなっていないのが現状です。そこで、東京都の精神科身体合併症医療体制がどうなっているかですが、「東京都精神科患者身体合併症医療事業」という制度があり、急性期の治療を行っています。一般病院では対応困難な精神科身体合併症を有する都内の精神障がい者に、身体面、精神面から治療を行っています。

この制度は急性期の患者が対象で、滝山病院に入院している患者は対象外です。

現在、滝山病院には、約８０名程の患者さんが入院していますが、転院・退院希望をしている患者さんの１割ほどしか出られていないのが現状です。是非、慢性期の患者の転院を受け入れてください。それが、公立病院としての使命ではないですか。

ちなみに、都立病院、その他の急性期の対応病院名は次のとおりです。

I型（夜間休日対応）

都立松沢病院、広尾病院、墨東病院、多摩総合医療センター、豊島病院

II型（平日対応）

都立松沢病院、青梅市立総合病院、共済立川病院、多摩済生会病院

III型（専門治療対応）

都立松沢病院、豊島病院、荏原病院、青梅市立総合病院、共済立川病院、永生病院、NTT東日本関東病院、東大付属病院、東京医科歯科大付属病院、日大付属病院、慶応大付属病院、順天堂付属病院、順天堂付属東京江東高齢者医療センター、結核予防会複十字病院、都健康長寿医療センター、国立精神神経医療センター、国立国際医療研究センター多摩済生会病院、北野台病院、西八王子病院、東京武蔵野病院

滝山病院は事件発覚後対象外

これが現在の東京都の急性期治療の体制です。今後、都立病院が慢性期の患者の受け入れをして欲しいと思います。

Copyright ©2023 精神保健福祉家族会 シュロの会

シュロの会 学習会 報告

去る１0月29日、くにたち福祉会館で学習会が行われました。今回は、うつ病と１７年間闘ってこられた木村健太郎さんのドキュメンタリービデオを見ました。監修：大野 裕先生：国立精神医療研究センター認知行動療法センターセンター長(当時)です。

木村さんがうつ病を発症したのは、19歳、大学生の時。希望の大学に進学できなかった挫折感からでした。以来２度の自殺を試みながらもその度に立ち上がり、周囲の理解とサポートに支えられながら、紆余曲折を経て、自分なりの生き方を見つけるまでの過程が、ご本人、ご両親、友人や周囲の方の視点から語られていました。何事にも完璧主義だったという木村さん。発症する前にはもういっぱいいっぱいだったことにもう少し早く気づいていればというご両親。その姿に病気は違えど、私自身もそうでしたが、「ご家族やご自身が重なって見えた」という感想が多く聞かれました。

木村さんは3度の離職、ひきこもりを繰り返しながらも、現在は職業訓練をするために通った特例子会社で、今度は教える側の講師として活躍しておられますが、現在も症状に波はあり、服薬をしながらの勤務だということです。　ご結婚もされ、奥様とともに言っておられた、「具合は悪いけど楽しい」という言葉と穏やかな笑顔が印象的でした。具合はどこも悪くないけれど、人生が楽しくない、つまらないという人も沢山いる中で、病を抱えながらも木村さんがそのような心境に至ったことは本当に良かったと心から思いました。また、そこに至るまでにはご自身の努力もそうですが、周囲の理解やサポートが自然な形で大きな助けとなっていたことも幸いしたのだろうと感じました。

精神疾患を一人で、また、家族だけで抱え込むのは難しい。みんなで支える社会のしくみや理解がもっと必要だと感じました。その中で、一人でも多くの当事者やご家族が笑顔になるために、家族会のできることは何だろうか、とそんなことも思いめぐらせた学習会でした。

また、最後に大野先生が行動認知療法として、木村さんと対話される場面が収められていましたが、自然な会話の中で、当事者の思考を整理し客観的視点を与えながら、こう考えるといいかもしれないねと、偏りがちな思考の修正を図っていかれる姿が印象的でした。先生のようには難しくても、日々の家族との対話の中で生かせるかもしれないと思いました。　（報告：H）

ミニ交流会・サロン等の案内

◇忘年会のご案内◇

季節が巡り、はや忘年会の時期となりました。
今年もいろいろな事がありました。
溜まったストレスを発散して、新しい年への希望を見つけましょう。皆様のご参加をお待ちしております。

【日時】12月10日(日)12時~14時30分
【場所】がんこ立川店（立川駅北口、みずほ銀行隣 OSJ TACHIKAWA８F）
【会費】 4,500円　【締切り】11月30日（木)まで
【申込☎】家冨 090-1779-1641 前田 080-6581-8826

講演会「暴力・暴言は、なぜ起きる」	
日 時	12月16日（土）
講 師	山澤 涼子氏（大泉病院社会医療部長）
会 場	新宿区立障害者福祉センター

円グループ・シュロの会サロン おーぷんダイニングen（円） 国立駅南口徒歩5分 国立市東1-17-20 ｻﾝﾗｲｽﾞ21ﾋﾞﾙ203	
日 時	11月12日（日）10:00-12:00,13:30-15:30
内 容	(午前) 広報紙発行 役員会 (午後) 相談※
日 時	1月14日（日）10:00-12:00,13:30-15:30
内 容	(午前) ミニ交流会　お茶飲み会 (午後) 相談　※相談には予約が必要です 植松　☎080-1211-6898

シュロの会ミニ交流会	
日 時	1月28日（日）13:30-16:00
会 場	くにたち福祉会館　中会議室

Copyright ©2023 精神保健福祉家族会 シュロの会

みんなねっと埼玉大会 報告

【日時】2023年10月14日（土）～15日（日）
【会場】Rai Boc Hall (市民会館おおみや)

全体会　第15回全国精神保健福祉家族大会　みんなねっと埼玉大会「家族まかせにしない社会に」
主催：(公社)全国精神保健福祉会連合会(みんなねっと)・埼玉県精神障害者家族会連合会(のぞみ会)
全体会は、会場参加と当日オンライン配信があり、全体会・分科会ともアーカイブ配信があります。

□『ｵｰﾌﾟﾆﾝｸﾞｺﾝｻｰﾄ』トイピアノ＆トーク　畑奉枝氏
兄が統合失調症を発症して、傷つき追い詰められていった家族を救ってくれたのは小さなおもちゃのピアノ＝トイピアノでした。音程がダメでもそのまま使う。直さないでそのまま使う。不完全でも弾くと昔聞いたことのある懐かしい音になります。当事者の家族の話は深く心に響いてきました。

□基調講演　講師:日本ケアラー連盟代表理事　堀越 栄子氏
ケアラーが個人として尊重され、より良い生活や人生を送れるように支援することを一緒に考えたい。

□特別講演　講師:公益社団法人やどかりの里理事長　増田一世氏
家族も自分自身の選んだ人生を歩むことは大事な権利です。障害者権利条約は、環境によって障害は重くも軽くもなるといいます。親からの独立が保障される社会制度が必要です。（報告：丸山）

第一分科会 10月15日㈰午前10時～12時　市民会館おおみや小ホール
テーマ「ケアの脱家族化を考える」～本人と家族双方の自己実現を目指して～
◆ファシリテーター　仏教大学　塩澤　卓氏「ケアの脱家族化を考える－本人と家族双方の自己実現を目指して」と題して、次のような話をしてくれました。
精神障害者家族は、制度的にも実践上も精神障害者のケアを強いられ続けてきた。家族を対象とした大規模調査においても、同居家族は、食事や通院・服薬、お金の管理、生活リズムの保持、近隣との付き合い方など、直接的なケアを担い、精神障害者の地域生活を支えていること。
◆発言者：栃木県ケアラー支援推進協議会委員　仲田海人氏 ～きょうだいの立場から～
日本で先人が築き上げてきた「きょうだい」としての活動の歴史は長い。しかし、「ヤングケアラー」をはじめとする報道の中で「きょうだい」が再び社会の中で取り上げられることも増え、注目される機会が増えてきたのは最近だと言える。
◆函館市配偶者の会　吉荒龍哉氏～配偶者・パートナーの立場から～
精神疾患を抱える当事者を取り巻く「家族」にも「親」「こども」「きょうだい」など様々な立場があり、それぞれの立場でのつらさや大変さがあると思います。「配偶者・パートナー」の立場はどうでしょうか。当事者の疾患への対応のみならず、子育てや就労など、種々の課題や責任と一人で向き合わざるを得ない場面も多 いと感じています。
◆さいたま市もくせい会家族会　山口ふみ子氏～親の立場から～
突然に立ちはだかった子の精神疾患、受容する事ができず、悲嘆にくれた時間は長い。誰に相談すべきか、医療への結びつく扉はどこにあるのかと家族も子と共に時間が止まった生活を続けていた。（第一の壁）ようやく家族会に繋がり、精神疾患の実態を学びながら、回復のプロセスに至るまでの道のりはさらに長い時間を要した。日本の精神医療の実態や、社会の偏見・内なる偏見、社会資源の貧しさと個人の努力だけではどうしようもない深い闇を感じた。（第二の壁）人が回復するのに締め切りはないが人の命には限界がある。症状が激しい時、子の存在が絶望的存在に化し、親として犯罪の道を選択するかもしれない恐怖心が続いた。家の外の力に援助を仰ぎたいと願い続けたが、社会資源の中にその力を見つけ出せなかった。そんな折依存を否定しない自立があっても良い、起きた出来事と人を分けて考える、責任を問わない考えがあることを知った。子は親の私物でないのだから、必要に応じて社会というシステムの中で育ち大人にならなければならない。責任を取らされる家族とならないために行動すべき、どう行動するかはそれぞれにあると思いがけない言葉を投げかけられた。この一石は大きく、家族に勇気を与え学ぶこと・発信し続けることの大切さを知った。（第三の壁）
◆さいたま市見沼区障害者生活支援センターやどかり相談支援員　三石麻友美氏～支援者の立場から～
やどかりの里は、１９７０年に精神障がいのある人たちが地域で生き生きと暮らし、働くことを目的として設立された。現在２９０人の障がいのある人が様々な資源を活用して暮らしている。活動の原点は「お茶の間」です。そこでは、おしゃべりしても何も話さなくてもいい。「ここにいていいんだ・・・」と誰もが感じる空間づくりを目指しているとのこと。（報告：植松）

Copyright ©2023 精神保健福祉家族会 シュロの会

第四分科会　１０月１５日㈰午前１０時～１２時
市民会館おおみや小ホール
テーマ「これからの家族会」
～工夫し活動する様々な家族会から学ぶ～

司会を含め４名が登壇しました。親が立ち上げた家族会（２名）の他は、配偶者・パートナーの会やこどもの会の代表です。私は兄弟姉妹の会があることは知っていましたが、配偶者・パートナーの会・こどもの会については全く知りませんでした。それぞれの立場が違うのですから、それぞれの家族会が存在するのは、考えてみると当然のことでした。

家族会は全国的に高齢化や会員減少の危機にありますが、みんなねっとが３年前に始めたインターネットを通しての会員は飛躍的に増えています。つながりの傾向が違ってきているようです。

今回の４家族会は家族だけで抱えずに行政・支援者をうまく巻き込んでいることが活動を活発にする原動力になっています。専門性を持った身近な市会議員や地方・国会議員・官僚と訪問看護師・医師・ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ等の関係者が会合に参加するそうです。親中心の家族関係で、今まさに困っていることが専門家によって速やかに解決できるように取り込んでいます。配偶者・パートナーの会、こどもの会は地域と密接な関係がないために、研究者・学生の支援者を受け入れています。また、これらの会への相談を地域の会へつなげていくといったような家族会同士の連携が重要となっています。（報告：前田）

自由ひろば

数ヶ月前、娘の誘いで温泉に行って来ました。

温泉といっても国立から電車で小一時間、都心からも10分程の立地にある温泉です。最寄り駅の改札を出ると、両側に和風建築と木々の緑、石畳の小道が続いています。丁度、夕闇が迫ってきた頃で足元にはぼんやりと薄明かりが灯され、別世界に誘われたような錯覚を覚えました。

そして、フロントロビーへ。そこは「山居の趣」をテーマにブレンドされたお香が広がりふっと肩の力が抜けていくようでした。

肝心のお湯は箱根芦ノ湖温泉から運ばれた源泉で癖のないアルカリ性単純温泉です。

平日ということもあり、混雑もなく中庭を望む内湯とヒバの露天風呂で心まで癒され、束の間のひとときを愉しむことができました。　（S）

【編集後記】

長男の精神疾患発症で夫婦関係が悪くなり、私の心も病みました。昼も夜も徘徊していた時があります。小金井公園で日本画を生業にする82歳の男性に出会ったのはそんな時でした。あまりにもボーっとした幼少期で養護学校に入れられそうになったり、中学卒業後、漁師はじめいろいろな仕事を経験して「絵を描きたい」気持ちが高まり師匠宅に丁稚奉公して、独特な日本画を描くようになった男性です。

脳梗塞になって生きる希望を失い、足を引きずりながら多摩川沿いを夜通し二子玉川まで歩き続けたり、前立腺がんになり「肺にも転移してます」と言う医師の話よりも、自身のレントゲン写真に魅了してしまったり、ホルモン療法で女性化した体を楽しんでみたりという話ばかりしてました。昨日、久しぶりに電話しました。前立腺がんが再発して尿の出が悪く一日に40回もトイレに行ったり、全身が酷く痛んだり、夜寝る暇もなくて、救急車で病院に行き管を入れてもらったらすっかり楽になって幸せだという話。自転車で転倒して右膝の靭帯を損傷して外歩きが出来なくなったり、直腸がんになったり、昨年、娘さんを54歳で亡くして寂しくなった話が続きました。

外歩きは出来なくなったけど、狭い家なので摑まるところがいっぱいあるから家の中で移動出来るのがありがたい。長いこと外に出てないが、引きこもりも楽しいものだと思えてきた。

妻もパーキンソンで共に歩行困難だが、介護保険で人の世話になるのは嫌いだ。日本画の創作意欲がますます盛んになり、11月末から12月初め個展をするので案内を送りますと。息子さんがマネージャーです。

辛さ苦しさを楽しみに変えていく心の余裕を持ちたいものです。　（丸山）

Copyright ©2023 精神保健福祉家族会 シュロの会